

特集

絵画をめぐる 心理学

ヒトを他の動物から区別する特徴のひとつは言語ですが、文字を使用するようになる前段階として絵による情報伝達があったことは明らかです。心理学と絵画とのかかわりを考えるときに、絵画や図版は投影法検査の素材として多くの心理学的知見の蓄積を支えてきたことがすぐに思い浮かびます。そして、3次元の空間と対象、およびその動きを2次元のキャンバス上に写し取ろうと磨き上げられた絵画の技法は、視覚心理学が受け継いだ大いなる遺産といえるでしょう。今回の特集「絵画をめぐる心理学」では、4名の先生にそれぞれの専門領域から、心理学と絵画とのかかわりについての記事をお願いしました。脇田真清先生にはサルとヒトがそれぞれ絵をどのように観ているのかについて、小川俊樹先生には代表的な投影法であるロールシャッハ・テストの「絵」としてのおもしろさについて、ノーマン・D. クック先生らには逆遠近錯視という奥行錯視アートについて、佐藤隆夫先生にはダヴィンチの「モナリザ」の視線の不思議について、それぞれ解説していただきました。

(櫻井研三)